

入来町麓と八重から

世界大乱の時代を考える



中西 喜彦

一、不思議なご縁を得て

最近武家屋敷群として整備されてきた入来町浦之名には中世清色城の在った麓地区と山側の八重地区がある。八重山は南側が鹿児島市に合併した郡山町の一部でもあり、西側は薩摩川内市に面し、甲突川や川内川の水源地の一つになっている。筆者はこの八重山の入来町側の丘陵地に位置する約150ヘクタールの大学牧場建設と運営に約38年間関与した。一方、麓地区には7年前の平成22年3月に、入来花木会故入院貞子氏主催の8月開催された第7回入来薪能の取材で茅草

門邸を訪問した。以来、庵主人来院重朝氏に色々とご指導を頂いている。

入来牧場の概要は本冊子9号（平成25年発行）で詳しく説明しているので要点だけ述べると、この牧場建設や運営に主体的に関与したことで、牧畜民族が主体をなす、欧米や中国の人達の考え方がある程度理解できるようになったと考えている。翻ひるがえつて我が国について考えると稲作民族としての考え方が強く、欧米人や中国人との考え方の違いを感じている。

一方、入来薪能のご縁で、入院家に入入りし、入来文書や渋谷一族の薩摩下向の歴史などを知ることが出来た。筆者は能に興味を持ち、冊子6号でも書いたように人生の指針みたいな感じを持っている。室町から江戸時代に武家の式楽として活用されて来た。歴史の一人語りのような面があり、殆ど内容に変

更がなくそのまま現代まで守り伝えられている。11号で故入院貞子氏が7回にも亘って入来薪能を開催された意味を^{そんたく}忖度してみた。繰り返しになるが能「鳥追舟」は薩摩川内市鳥追集落での物語を題材にしたものを代表に、中世の社会を紹介する題材の演能を7回も薪能として試みられている。

庵主重朝氏の見解では日本の歴史は鎌倉時代からが現代日本のあり方に繋がっている。それまでは支那と類似の国家形態だったのではないかとのことである。筆者もそれに賛同するものである。故貞子氏には入来院家と相良家が日本で一番一箇所への定住期間が長いとお聞きしたことがある。そういう意味では朝河博士の「入来文書」や「貞子の語る入来文書」をはじめとして、茅茸門庵主の歴史に関する見解は傾聴するべきものと考えている。

教示頂いた本に「落合莞爾・金融ワンワ―

ルド、成甲書房、平成25年」がある。地球経済を統べるものたちはいるという内容である。本著は「歴史に向き合う重要性」を強調されているが、血筋が語る趣があり、後醍醐天皇の息子護良親王を遠祖とした方である。



故入院貞子さんが入来籠に移り住んで来られた頃商品化された「茅門まんじゅう」。その後途絶えていましたが、清色地区の事業として製造が復活しました。平成28年5月「武家茶房 Monjo」で撮影。

渋谷兄弟が関東から薩摩に下向したのが1248年であり、ほぼ入来院家の遠祖定心が活躍された時期と機を一つにしている。公家と武家の子孫の歴史に対する所感は他の追従を許さぬことを実感しているところである。

二、今後の世界の動向は

ところで、第二次世界大戦後70年を過ぎると流石に米国も戦争疲れて悩んでいるように見える。各地で銃乱射事件が起き、国際派で米国は世界の警察官だと言っている人達は、トランプ旋風に慌てている。欧州は移民・難民問題、さらに経済問題で難儀をしている。七つの海に君臨した大英帝国は、ユーロ圏離脱問題でユーロ圏のみならず自国も分裂の兆しが強い。

近隣の中国も我が国には爆買などで歓迎される面もあるが、実態は既に経済破綻に陥入っているとも言われている。露はエネルギー

供給問題で欧米と対立している。

今後世界はどうなっていくのであろうか。歴史は繰り返すと言うが現状は第一次大戦前後に似ていると言う人もいる。筆者は地勢や民族の本質が変わらないとすれば当然同じような動向を繰り返すのではないかと思うのである。特に、人は80年ぐらいの周期で入れ替わるので、また、最初から人生が始まると言える。その際頼りになるのは歴史観である。突き詰めると地勢に合わせて、如何に食べ、如何に子孫を残すかということになる。

落合莞爾氏は天孫騎馬民族、海洋民族、倭族の合作競争により日本の歴史を形成して来たと述べている。最近の考古学はDNA分析や発掘技術の発達により、10万年前からの民族の消長を世界全体で明らかにできるようになった。それらをもて言えることは欧米や中国などの国では牧畜民族が主導権を行使して

来たように思われる。世界史の始まりと言われる元朝の世界統一はひとえに馬と弓の力によると言われている。

現在の世相をみると生活形態から来る考えに対して誤解が多いように思われる。特に今後の世界動乱の中で日本の方向を定めて行くには、牧畜と農耕と言う基本的な食料生産の営みで身につけた性^{さが}を互いに熟知することが必要である。そこで、牧畜の特徴を明らかにし、日本の性(習性)との違いを考えてみたい。

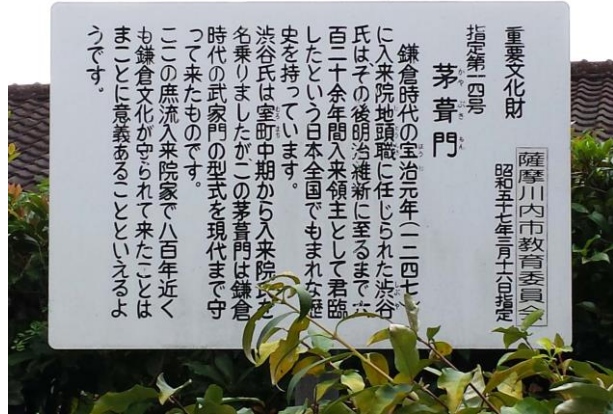
三、我が国の立ち位置

米国で歴史教科書として採用されている≡マクニール氏の世界史では中世ヨーロッパと日本を次のように紹介している。「日本は中国と、西ヨーロッパはビザンティウムと、という風に、どちらも、既存の、高度に発達した隣接の複合文明社会との関係が密接だっ

た。また、日本もヨーロッパも、きわ立って軍事中心の傾向を示し、またそれが、文明社会の民族の間ではどこにもみられないようなあり方で、社会の全階層にゆきわたっていた。このため、近隣の文明開花の社会に対しても一種の毅然たる態度が生まれ、したがって、ヨーロッパ人も日本人も、そのような隣人たちから、よいと思つたものをなんでも取り入れて、しかも自分たちの誇りの気持ちや文化的個性をなくさないでいられた。その結果、類例のないほど柔軟な進歩成長の能力を彼らは持つようになって千五百年ごろまでに中世ヨーロッパも日本も、多くの点で世界のどの文明と比べても引けをとらぬ文化水準や文明のスタイルに到達した(増田義郎・佐々木昭夫訳、中公文庫)。

ここで、前号でも触れたが「貞子の語る入来文書」の出番である。入来院家は鎌倉時代

の渋谷一族下向以来明治維新までほぼ現在の場所に居住した我が国でも稀有な存在である。朝河貫一氏の日欧の封建制度の比較研究は日本の例として、入来院家に保存されてきた記録を主に研究されている。骨子は日本の上級



800年近くの歴史を有する茅葺門の由来を記した案内板。茅葺門をくぐったすぐ右手にあります。

武士と下級武士・農民の関係は忠誠心と比較的平等な経済性に依存するのに対して、ヨーロッパでは王家と騎士集団との契約によるものである。能楽の題材になった「鳥追舟」は川内川流域の日暮集落の主人が土地訴訟で京都に上り、仲々帰省出来ない内に、家来に家乗っ取られて母子が鳥追舟に乗せられて田圃の鳥を追い払っているところを主人が帰省して、家来を咎める話である。また、筆者の本籍である福岡の芦屋の能「砧」^{きぬた}は土地訴訟のため都に上った主人が帰省しなかつたので、妻が恋い焦がれて死んでしまう話である。

また、家来の主人に対する忠誠心を示した曲として「鉢ノ木」がある。元寇で活躍した北条時宗が僧形に身をやつし、全国の民情を視察した時のことである。冬の雪空で通りかかった家で宿を乞うも断られる。さらなる懇願に対応した主人が何も無いが昔世に出てい

た頃に丹精して育てた、梅、桜、松の植木鉢を薪にして接待する。その時、自分は今落ちぶれているが一旦幕府に交事あれば馬に跨り鑄び刀を持って陣に駆けつけるといふ。

時宗が帰国後全国に召集令をかけることやせ馬に乗って駆けつけたという。時宗大變喜び薪になった鉢ノ木の代わりに梅桜松と名のついた土地を与えたという。我が国では室町時代にほぼ日本文化の基礎が出来たと言われている。北条時宗の時に元寇に勝利したものの、戦に疲弊し次の戦国時代に進んで行く。丁度信長、秀吉の時代に西欧の東南アジア進出と重なり、ポルトガル、スペインの訪日布教は、土地の支配問題もからみ遂にはキリシ教の国外追放と鎖国へと進んで行く。

このように見てくると秀吉の時に石高として米の生産量で各土地の評価が決まり、士農工商と言われるように稲作による土地生産

に基盤が置かれてきた。このような推移で現代の日本の形が作られたと考えられる。

四、牧畜と農耕の特徴

牧畜では山羊、羊、肉用牛、乳用牛を飼育して、肉、乳、羊毛および皮などを生産する。

一般論的として牧畜と農耕の違いは1年間に亘って生産資源としての動物を飼育しなければならぬのに、作物生産は播種、生育、収穫とかなり間々で手抜きが出来る。さらに種子と言う形態で再生産の資源を保存できる。

しかし、牧畜では種畜と雌畜を常に飼育していなければならない。日本でみられる四季のほかに、乾季と雨季の国がある。いずれも6月から9月までの牧草の最盛期しか良質の餌となる牧草は得られない。そこで、夏期を中心に牧草を刈り取り、干し草やサイレージ(一種の漬物)に加工して蓄える必要がある。これらの作業は常に家畜を飼育しながらの作業

なので、田植えや稲刈り以上にハードな仕事になる。

欧米の畜産業を見て廻つての第一印象は我が国との規模の違いである。30年程前、コロラドで75万頭の集団飼育施設を見学した。1施設で鹿児島県の肉用牛飼育頭数の約3倍の頭数である。一般にフィードロットと言われている施設で屋根はなく、五百頭単位で仕切られていて、給餌施設は自動化されており、馬にのつたカーボーイが数人で管理しており巡回して患畜や死亡したものを監視していた。

当時案内してくれた栄養学の教授はロッキーマウンテン麓で放牧された子牛を集めて購入するが、その糞の形状からどの群の子牛の生育が今後良いかを判断することであった。日本のように1頭ずつ検査するのは異なっている。また、現場につくまでの道すがら一

面のトウモロコシ畑が続き、収穫されたトウモロコシはサイロにも入れずに一面に野積されていた。雨量は年間500ミリぐらいで鹿児島島の四分の一程度である。

フランスで国際家畜繁殖学会がニースであつた時に参加した。フランスの畜産を紹介するツアーで2泊3日のバス旅行でパリからニースまでの経路で行われた。感心したのは土地の形状に合わせて飼育する家畜が異なっている。丘陵地では山羊を飼い、山羊乳を搾しぼって長期貯蔵が効き運搬に便利なブルーチーズを生産している。冬の時期であつたが干し草が沢山貯蔵されていた。また、牧野の地力や収量などにより肉用牛と乳用牛の飼育が地域ごとに行われていた。

これに対して我が国の畜産は欧米では自給が可能な家畜飼料穀類を輸入している。所謂加工型畜産である。しかし、周年の作業工

程は同様である。

七、おわりに

世界大乱の現状をみると、金融を中心としたグローバルイズムと産業を中心としたナショナルイズムがせめあっているように見える。その根底に農耕民族と牧畜民族の生活の知恵の違いがある。また、これに地勢と民族などの特色が加わる。日本人は単一民族みたいに考えられがちであるが、落合莞爾氏の説を借用すると、メソポタミア地方を源とする人達がインド、中国、朝鮮などを經由して、日本列島に縄文、弥生、古墳時代を通じて、住み着き現在日本の基礎作りに関与しているという。

古田武彦氏の説では663年の白村江の敗戦で、我が国は唐に39年間占領されていたという。日本国を名乗るようになったのが大宝律令701年。しかし、科挙以外は殆ど唐の制度が取り入れられている。やはり現代

のもととは封建制度を取る武士社会からになる。このようにしてみると四千年の歴史を持つと言われる中国も岡田英弘氏の「古代のままの窃盗団王朝」であり、移民の国米国はわずかに江戸時代ぐらいしか熟度のない国と言える。

現代日本の土台は鎌倉時代に権力を握った幕府から領地を分配され、それを維持するために、武芸を磨き武器を揃え「一所懸命」に領地の開発に励むようになる。また、宮廷文化も取りいれ、独特の武家文化を樹立してきた。これは前述の歴史教科書のとおりである。

その証として、当時世界最強の元軍団の襲撃を二度も退けている。そのような視点から入来をみると色々な点で興味が尽きない。元寇の際博多防衛で奮闘した入来院三兄弟を祀る若宮明神社を始めとして歴代、廣瀬神社、重來神社などがある。先日も茅葺門近くの赤

城神社跡を散策していると1600年代奉納の石灯籠があった。繰り返しになるが入来薪能では鎌倉時代の入り口のところを再現するため、屋島、清経、忠度および巴と源平合戦や木曾義仲の戦いを上演している。土地訴訟では「鳥追舟」が紹介されている。

渋谷5兄弟薩摩下向の中で、入来院だけが明治まで存続しているのは偶然だけではないと考える。初代の定心（入来院五郎房）は仏門に帰依しており、かなり丁寧な住民対応があったのではないかと想像される。さらに、何処の家も同様なことであるが、領地の攻防だけでなく、婚姻対策が上手く行き、薩摩の覇者島津家とも何とか共存できたと考えられる。

この中に、国家、領地、家などに対する忠誠心が育まれ、公私の別も自然に醸成されたものと考えられる。また、能の曲目には鉢ノ

木のように幕府への忠誠心を示したものがある。最近前東京都知事舛添要一氏の公金私的流用問題が起こったが本人は法律に違反しておらず疚しいところはないという。これに対して99%の都民が「せこい」と怒ったのに感心した。ひよっとすると、中国や韓国人にはこの公私の感覚は分からないのではないかとさえ思ったのである。

○牧畜の特徴

一方、八重での牧場経営や欧米での実地見学は、彼我の利点と弱点を知ることが出来る。稲作では美田を維持して、田植えや稲刈り時期に人力を集中する産業である。ところが牧畜では1年間に亘って肉牛にせよ乳牛にせよ毎日餌を食わせねばならない。欧米では牧野の面積を広く取り牧柵で囲って管理する。ところが実際やってみると、10キロの牧柵を張り巡らしても1メートルの破れがあると



平成27年8月の台風15号で倒壊した茅葺門。平成28年4月、本誌表紙の写真に見るように新しく再現されました。

隣接地の牧野に全頭逃げ出して困った。1年中の飼料の確保、分娩管理、子牛育成、搾乳など1年中絶え間なく働くため、年間を通じて必要かつ最低限の労力で接する必要がある。1年間に亘って牛を飼育する技術は稲作と全

く異なったものである。各時代の戦争において、牧畜系の民族に農耕系の民族が負け続けたのもこの生活形態に原因があると思われる。第二次大戦に於ける日本軍の敗戦も戦線拡大に対して兵站が対応出来なかったことに尽きるのではないかと思われる。

○今後の対応

今後の日本の行く末を考えるには、「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」とある。まず民族であるが、最近のDNA分析法の進歩により、世界各地で出土した遺骨の遺伝子の種類が日本は非常に多様性があるということである。所謂我が国では各地方で異なる民族が共存して来たことが伺える。地勢でみるとアジアモンスーン地帯で、高温多雨で周囲を海に囲まれている。水田稲作は非常に効率的に食料を確保でき、海や川からの魚介類を加えるとかなりの人口扶養力がある。しかし、

地震、雷、火事、台風などに見舞われ、独特の人生観を創り上げてきた。能でしばしば取り上げられる「草木国士悉皆成仏」という思想である。自然との共生ということもいわれており、今後の重要な指針になると考える。

民族については家の格や経済状態なども考慮して婚姻が盛んに行われてきた。士農工商と言うが武士社会での上述のあり方が他の階層にもおよび家と言う単位で維持されてきた。やはり島国で練り上げられた血縁と3世代ぐらいの単位が良いと思われる。

今後情報入手が益々容易になり、また、職業の選択、移民などが多くなってくると、何を基本に置くかを良く考えなければならぬ。前述のように約800年に亘り一箇所に定住して来た秘密は大変貴重なものである。また、牧畜民族の生活はかなりシンプルライフでかつ個人的判断を要求されることが多い。筆者

はこの両方の体験を入来町浦之名麓と八重で行うことが出来た。また、我が国の来し方を説く能楽によって引き合わせて戴いたことに感謝したい。



談笑中の庵主・入来院重朝さん（右）と炉ばたセイ談会会長の桐野三郎さん（平成27年9月重朝さん宅にて撮影）

（鹿児島大学名誉教授）